

P.L.バーガー「現実の社会的構成」論における 問題性と可能性

吉田 幸治*

本稿ではアメリカの現象学的社会学者P.L.バーガーを取り上げ、彼の社会理論的業績である「現実の社会的構成」論（現実構成論）の批判的検討を行う。バーガーは自らの初期的取り組みにおいて、当時の理論的パラダイムである機能主義理論に対抗すべく、人間の主体的側面に注目した社会学を構想していた。しかしその後発表される彼の現実構成論は、必ずしも人間の主体性や社会の動的側面を十分に捉えうる社会理論となり得ていない。この点を確認するため、まず彼の初期的著作である『社会学への招待』をとりあげ、認識の脱自明化（意識の自由）への提言や、そのような「自由」を含みもつ社会学の構想が語られていることを確認する。その上で、彼の現実構成論がまとまったかたちで示されている『日常世界の構成』及び『聖なる天蓋』をとりあげ、ここでの概念構成・理論図式を詳細に検討することによって、彼が最初に企図していたはずの社会学の構想に反し、彼の理論が秩序志向的な性格を持つ点について明らかにしていく。さらにこの問題点を、「物象化」に対するバーガーの両義的評価に起因するものと捉え、これを彼の著述をもとに内在的に明らかにしていく。そして最後に、彼の現実構成論に対する理論的補完の必要性を「主体化」の観点から検討し、これを本稿の分析枠組みである行為論（存在論）的レヴェルと意識論（認識論）的レヴェルとの区別と関連において考察する。そしてこの考察によって、「人と社会がともにつくり つくられる」動的な社会理論として、バーガー理論が再生する可能性の一端を明らかにする事を試みる。

キーワード：意識の自由、「現実の社会的構成」論、外在化 - 客体化 - 内在化、人と社会の弁証法、物象化、主体化、行為論（存在論）的レヴェルと意識論（認識論）的レヴェル

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 目次 | (2)「ドラマとしての社会」論における自由 |
| ・初期バーガー社会学における「自由」の提言 | の論点その2 |
| 「ドラマとしての社会」論 | 哲学的パースペクティブによる「自由」 |
| 1. 「新しい社会学の一環」としてのバーガー社会学の登場 | の提言 |
| 2. 『社会学への招待』における「自由」の提言 | ・バーガー現実構成論の問題性 |
| (1)「ドラマとしての社会」論における自由 | 1. 「自由」の提言から「現実構成論」の展開へ |
| の論点その1 | 「意識批判」としての「物象化」論文 |
| ウェーバーの「カリスマ」論とゴフマン | 2. バーガー現実構成論の問題性 |
| の「役割距離」概念 | (1)『構成』における現実構成論の概要 |
| | (2)バーガー現実構成論の問題性 |
| | ・バーガー現実構成論における「主体化」の可能性 |
| | 1. 意識レヴェルでの主体化契機その1 |

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

- バーガーの「身体」観と「意識の二重性」論
2. 意識レベルでの主体化契機その2
「態度変更の常態化」としての現代社会
 3. 行為レベルにおける主体化契機の理解に向けて
現実構成論に対する理論的補完の必要性

・初期バーガー社会学における「自由」の提言 「ドラマとしての社会」論

1. 「新しい社会学」の一環としてのバーガー 社会学の登場

第二次世界大戦以後、アメリカ社会学を席卷していたのはT・パーソンズ（Talcott Parsons）の機能主義理論であった¹⁾。しかし1960年代から1970年代にかけて、アメリカをはじめとする先進産業諸国は様々な形での社会的・文化的変動を経験することとなり、この既存の理論的パラダイムに対しても異議の申し立てが展開された。その異議申し立ての先駆であり、アメリカのラディカル社会学徒に多大な影響を与えたC.W.ミルズ（C.Wright Mills）やA.W.グールドナー（Alvin W.Gouldner）の社会学²⁾は、ともにパーソンズ批判を展開しつつ、日常的な現実を生きる人間への洞察、及びその生活領域と科学領域とのつながりを問題化する視角を提示した。そしてその一潮流にあるのが、現象学的社会学であり、バーガーの社会学はこの中に位置付けられる。

1960年代のアメリカにおいて、「社会学の新しい方向」³⁾として急速に注目を集めるようになる現象学的社会学は、北アメリカの大学で盛んに取り組まれており、その当時バーガーが在籍していたニューヨークのニュー・スクール（New School for Social Research）、及びピッツバーグのデュケイン（Duquesne）大学などが拠点だったといわれる⁴⁾。そしてこのような新た

な社会学の流れは、哲学界における「フッサール・ルネッサンス」と呼応しつつ、哲学と社会学諸科学が相互に影響を与えあう学際的なダイナミズムのなかで進められていったのである⁵⁾。

P.L.バーガーの社会学も、まさにこのような新たな社会学の一環として登場してきた社会学理論である。自らこの流れの中に身を置きつつ現象学的社会学についての原初的な整理を行ったヒープとロス（J.L. Heap and P.A. Roth）は、1973年の「現象学的社会学について（On Phenomenological Sociology）」と題される論文において現象学的社会学を四つの類型に分類している⁶⁾。ヒープとロスによるこの四つの類型とは、広義の意味社会学、A.シュッツを直接の始祖とする「自然的態度の構成的現象学」、自己反省の社会学、エスノメソドロジーである。そして彼らは、バーガーの社会学を上記の の類型に属するものとして位置付けるのである。

しかし筆者は、バーガー社会学の持つ本来的な理論的豊かさを考えた場合、必ずしもヒープとロスが整理する の類型のみに留まるものではないと考えている。彼らの分類における の類型とは、「明確に現象学的かつ哲学的な視角をその基礎に採り入れている」社会学とされており、A.シュッツ（Alfred Schutz）とその系譜をひく研究者達によってなされた社会学として整理されている⁷⁾。彼らによると、フッサールによって示された「生活世界の存在論（ontology of life-world）」、すなわち、それまでの社会学があまり取り上げてこなかった不変的かつ形式的な生活世界の構造、社会的現象がその中で生起し理解されるものとしての社会的世界の先験的な構造の探求こそが、シュッツによって取り組まれたテーマであったとされる。

さらに彼らは、シュッツが社会の「本質」について追求することをせず、「生活世界」「相互主観性」「自然的態度」等の概念を社会の存在に対する素朴な信念 (naive belief) として主題化し、自らの「自然的態度の構成的現象学 (constitutive phenomenology of natural attitude)」を構築したとする。つまり第二の類型とは、自然的態度によって社会が意味的に構成されていることに焦点を当て、その構成される様態を明らかにすることに主眼がおかれている社会学のことを指しているのである。

もちろんバーガーの社会学は、このの類型として表されるような側面を持つ。しかし筆者は、初期バーガーの著作の内容を考えた場合、少なくともその構想として持たれているバーガー社会学の性格は、ヒープとロスがの類型として挙げている社会学、「自己反省の社会学」とも近い性格を持ちうると考えている。ヒープとロスは、この第三の類型の社会学について、その研究の土台を現象学的な意味での「生活世界」の構造に据えながらも、より「哲学的に徹底化にされた (philosophically radicalized)」社会学であると表現しており、その代表的な論者としてグールドナーを挙げている。このような社会学の性格は、バーガーの社会学にも十分にあてはまりうるものである。すなわち、生活世界を対象とし、そこに内属するかたちで社会学が展開されることを標榜しつつも、さらにそこ（生活世界）から越え出ていく事を志向することによって、社会への批判的視点を確保しうる社会学としてのバーガー社会学である。そこで次節では、具体的に初期バーガーの『社会学への招待』を取り上げることによって、この点について確認していくことにしたい。

2. 『社会学への招待』における「自由」の提言

初期バーガーの著作である『社会学への招待』〔以下『招待』と略記〕においては、前節で触れたヒープとロス論文に照らして考えた場合、第三の類型、すなわち哲学的に基礎づけられ、「自由（認識の飽くなき相対化）」といった西欧的の学問精神を強く引き継ぐ社会学の側面が大きく顕れている。

『招待』はその全体を通して、「社会学的相対主義」とでも呼ぶべき視点によって一貫されている。バーガーは社会学の基本的な性格を表すものとして、「現実暴露 (debunking)」「体裁の剥ぎ取り (unrespectability)」「相対化 (relativizing)」「世界市民主義 (cosmopolitanism)」の四種を挙げている⁸⁾。そして彼は、このような認識態度によってこそ、通常は自明なものとされている社会的現実の「意味の多層性 (many layers of meaning)」⁹⁾が明らかにされることを強調し、社会学の意義とは人間経験におけるこうした多様性を開示することにあると主張するのである。

ここでさらに重要なのは、バーガーが、社会学における上記のような性格をルネサンス以来の「ヒューマニズム」の理念と密接に結びつけて理解している点にある¹⁰⁾。彼は、社会学における「現実暴露」的性格が、認識を遂行するための実証的次元のみに終始するものではなく、「知的解放」という価値的の理念と密接に結びついた概念であることを主張している。そしてこの「知的解放」を可能とする前提を、「意識的であること」、すなわち常態としての認識の脱自明性を促す「意識の自由」の実践にもとめるのである¹¹⁾。

筆者はこの「意識の自由」に関するバーガーの指摘ないし提言を、バーガー社会学全体を性

格規定する上できわめて重要な論点であると考えており、特に、本稿で後に見るパーガー現実構成論の問題性を考察する上で重要な評価軸になるものと考えている。この点は後述することにして、以下では『招待』に則しつつ、パーガーの「自由」の論点を確認しておきたい。

パーガーはこの「自由」の論点について、『招待』第六章の「ドラマとしての社会」論において三点に渡って言及している。それは M.ウェーバーの「カリスマ (charisma)」論、E.ゴフマンの「役割距離 (role distance)」概念、社会学的かつ哲学的な概念としての「エクスタシス (ekstasis)」である。さらに彼はこの三点の「自由」を論じるにあたり、これらを二つの次元に分けて論を進めていく。すなわちとを<第一の進路>と呼び、M.ウェーバーの「カリスマ」論、及びE.ゴフマンの「役割距離」概念に言及することによって、これまであまり論じられてこなかった人間の自由性について、その新たな社会学的接近を試みるのである。さらに<第二の進路>と呼ばれるものでは、上記に関して論が展開され、社会学的パースペクティブを更に越えた人間論的・哲学的考察として、人間が社会を構成することと「自由」との関係に対する議論が展開されるのである。

(1) 「ドラマとしての社会」論における自由の論点その1

ウェーバーの「カリスマ」論とゴフマンの「役割距離」概念

パーガーは第六章「ドラマとしての社会」論に先立つ本書での取り組みにおいて、人間が外在的な意味においても(第四章)、また内在的な意味においても(第五章)、いかに社会に拘

束されているかを浮かび上がらせる記述を展開している。第四章「社会の中の人間 (Man in Society)」で取り上げられているのは、外在的な意味での「社会統制」についてであるが、彼はこれを社会学における「デュルケムの理解」と呼ぶ。彼は社会統制をW.I.トーマスの状況定義論に従って同時代の人々による共謀の所産とするのであるが、さらに彼は、そのような状況定義の力が現在のみならず過去からも付与されることに注意を促す。つまりパーガーは、社会がその歴史性という側面から人間を規定する力をもつことを強調し、「監獄としての社会 (society as a forbidding prison)」¹²⁾という比喻のもとに、社会を「歴史的事実体 (historical entity)」¹³⁾として描き出すのである。

さらにパーガーは第五章「人間の中の社会 (Society in Man)」において、今度は人間による社会の内在化 (internalization) の側面に視点を通じ、社会統制が人間の内面にまでも及んでいる事を説明する。この説明でパーガーが使用する社会学上の知見は、社会心理学による「社会化」概念、及びその「役割論 (role theory)」である。彼は役割を「類型化された期待に対する類型化された反応」¹⁴⁾と定義し、社会的役割の総体としての社会は、個人が特定の状況で行為すべきパターンをあらかじめ提供していることを説明している。さらにここで重要なのは、役割には行為パターンの指示のみならず、その行為に付随した感情や態度の指示も含まれている事に注意を促している点である¹⁵⁾。そしてパーガーはこのような社会化概念に関わって導き出される人間像を、「眼に見えない糸に操られながら跳ね回っている小さな操り人形たち」¹⁶⁾と呼び、その社会像を「人形芝居 (puppet theatre)」¹⁷⁾にたとえるのである。

以上のように、バーガーは第六章に先立って、従来の社会学的発想による人間の社会的被拘束性の説明を展開している。そしてこれらは以下で見ていく通り、「ドラマとしての社会」論での自由の論点、すなわちウェーバーの「カリスマ」論、及びゴフマンの「役割距離」概念に対応しているのである。

まず、第四章で示された社会の外在性についての社会学的見解に対しては、バーガーはウェーバーの社会学を置くことによってその閉塞性を突破する。彼は「ある社会の『自明な世界』が突破されるという可能性」¹⁸⁾について考察を加えた社会学として、ウェーバーのカリスマ論を挙げる。彼はウェーバーに依拠しつつ、カリスマを「既成の〔社会状況の〕定義の力に対する途方もなく激しい挑戦」¹⁹⁾とする。彼は一方でカリスマによる支配が短命であり、その後には「日常化」と呼ばれる現象が続く事も指摘する。しかしながら彼がここで強調するのは、「歴史上のどのような反乱も長期的に見ればあやうさを含みもっているということにではなく、そもそも反乱が可能だ」²⁰⁾〔引用文中の傍点は引用者〕という点である。そして彼は自らが第四章において「デュルケム的」と呼んだ外在的な社会観に対して、「〔現時点での社会が〕たとえ堅固な構造をそなえているように見えたとしても、歴史の曙からそうした堅固さをそなえていた社会構造などありはしない」²¹⁾と述べ、「社会構造の諸特徴は、歴史上のさまざまな時点でさまざま人間たちが関与することによってできあがったもの」²²⁾である事を強調するのである。

こうして彼は、社会の統制システムが可能となるためには、その統制対象となる人々によって歴史的に確認・再確認されなければならない

ことを見いだす。そして更に、そうした確認を差し控えることによる人間的自由の実践について、「変容 (transformation)」「超俗の態度 (detachment)」「システムの操作 (manipulation)」の三種を挙げるのである²³⁾。この三種の概念は、先の第五章でバーガーが説明していた、人間を内面から統制するものとしての社会化、及び役割論に対するアンチテーゼとなっている。つまりここにおいてバーガーは、人間は自らに付与される社会的役割に対して、そこから意識的に距離を取りうる術を持つ事を指摘しているのである。そしてこの三種のなかで特に重要なのは「システムの操作 (manipulation)」に関するバーガーの議論である。

彼はゴフマンに依拠しながら「システムの操作」についての議論を行う。「システムの操作」とは、社会のシステムを正当でないやり方で私的に利用することである。この概念が表す人間像は、社会が指示する役割アイデンティティに対して距離を取った人間像である。彼はゴフマンによる「役割距離」の概念をもとにして、それを次のように再定義する。

「ゴフマンの概念〔役割距離〕は、より一般的に、内的同一化なしに意識的に役割が演じられる場合、言いかえれば、行為者が自己の意識と役割演技との間の内的距離を確立した場合にはいつでも適用することができよう」²⁴⁾。

そしてバーガーは「システムの操作」に代表される「役割距離」の行使に対して、そこに最も大きな人間的自由の存在可能性を見るのである。

「〔システムの操作者は〕正当な監視者たちには

予測もできないようなやり方で、社会構造を意識的に利用し、社会という密林の中に自己の目的に沿った小道を切り開く」²⁵⁾。

彼はこのように述べた上で、「最も手の込んだ統制システムでさえ出し抜き腐敗させてしまう創意工夫を人間が身につけているという事実は、社会学主義的発想が押しつけてくる憂うつ状態に対するさわやかな解毒剤である」²⁶⁾とまで言い切るのである。そして彼はここから、たたみかけるようにしてドラマとしての社会像を展開していく。

「『役割距離』は、道化役の操り人形が本物の道化役者となる転回点を示している。・・・<中略>・・・その本人は、今やはうきりと意識して自分の役割を演じている」²⁷⁾。

「こうして、監獄ならびに人形芝居という社会像に続いて、生身の役者たちがうごめく舞台としての社会という第三の社会像に到達する。・・・<中略>・・・われわれが今到達したドラマとしての社会というモデルは、舞台上の役者たちが、座長の設定するあらゆる外的強制、ならびに役割それ自体に由来する内的強制によって束縛されていることを否定するわけではない。それにもかかわらず、彼らには選択の自由があるのである。つまり、それぞれの役どころを熱狂的に演じることもいやいやながら演じることもできるし、また内的確信を抱きながらでもあるいは『距離』をもって演じることもできる。さらに、時には、そもそも演技を拒否することさえ可能なわけである」²⁸⁾。（引用文中の傍点は引用者）

このようにしてパーガーは、従来の一般的な社

会学が取り上げてこなかった人間的自由の实在を宣揚するとともに、そのような観点（人間的自由）を含みもつ新しい社会的パースペクティブの可能性を示すのである。

以上までは、従来の社会学が描き出す社会の拘束的性格に対し、同じ社会学の範疇においても十分に自由を含み持った社会学が可能であることを示唆したものであった。次にパーガーは自由に関する<第二の進路>、すなわち、社会の意味的かつ存在論的な構造としての社会的役割の世界と、人間的自由との関係に対する哲学的議論を展開するのである。

（2）「ドラマとしての社会」論における自由

の論点その2

哲学的パースペクティブによる「自由」の提言

彼はこの自由の論点に関する<第二の進路>において、まずA.ゲーレン（Arnold Gehlen）の制度論に依拠し、人間が自らの作り出す制度的世界によって行為が方向付けられている事から説明を始める。制度的世界とは、人間が構築する総体としての社会的役割の世界である。そしてこの制度的世界こそ、人間を無意味さという恐怖から防護する避難所であり、そのような社会においてのみ人間は本来的存在たりうることを指摘するのである。しかしながらパーガーは、人間がそのような制度的世界による命令を受け入れざるを得ないということについては、異議を唱えている。

「・・・人間は自分自身を欺いているのである。なぜなのか。その理由は、人々は実際、社会に対して『否』と言いうるのだし、しばしばそうしてきたからである」²⁹⁾。

バーガーはこの点についてJ.P.サルトルの「自己欺瞞」の概念を持ち出し、人間の行為が自由意志に委ねられていることを否定し、人間が生み出したはずの制度的世界をあたかも必然的なもののように理解することが、「選択の苦悩」からの不誠実な逃避と位置付けるのである³⁰⁾。つまり、社会的存在たらざるを得ないという観点による人間の本来性の設定に対し、M.ハイデガーの本来性 非本来性の議論を提示して、人間が常に社会を越え出ていく存在であるという観点からの人間学的本来性に注意を促すのである。そしてバーガーは結局のところ、「ドラマとしての社会」論の最後部分において、社会内における後者の意味における本来のありようが存在しうる³¹⁾と主張し、これを「エクスタシス」³²⁾という概念で提示する。これは「社会の自明な日常の外側に立つ」ことを指しており、バーガーが『招待』で標榜している社会学の特質を表す概念である。そして彼は、この「エクスタシス」の行使にこそ人間の本来性を見いだすのである。

以上本節(1),(2)で見えてきたとおり、バーガーは『招待』の中で、社会の中に生きる人間の諸規定が社会的に形成されたものであることを確認しつつも、なおかつそのような世界内 存在としての人間がいかにして社会に働きかけ、その変動に積極的に関わっていく存在となりうるかについて論じている。このいわばM.ウェーバー以来のきわめて社会的な問題に挑戦し、それに応えうる社会学を構想しようとしたのが、本書において展開される「ドラマとしての社会」論といえるのである。そしてこのことは、彼の社会学が、生活世界の先験的な所与性に基づく社会学(自然的態度の構成的現象学)を受け継ぎながらも、そこからの発展を志向し

ていることを意味しているのである。

バーガーはこうしてその初期の著作である『招待』において、自由を含み持った社会学の構想を示し、これ以後自らの社会理論的取り組みである「現実の社会的構成」論の提示を行う。しかし「現実の社会的構成」論においては、『招待』において明瞭に示されているような自由の観点が希薄化している。そこで次章においては、この「現実の社会的構成」論が示されている論文「物象化と意識の社会学的批判」、及び『日常世界の構成』『聖なる天蓋』を取り上げる事によって、その記述上の変遷を追いつつ、自由の観点の後退という問題点について指摘したい。

・バーガー現実構成論の問題性

1. 「自由」の提言から「現実構成論」の展開へ 「意識批判」としての「物象化」論文

バーガー社会学の理論的支柱である「現実の社会的構成」論〔以下、現実構成論と略記〕がまとまった形で示されているのは、T.ルックマンとの共著『日常世界の構成』〔以下『構成』と略記〕と、その翌年に出版されたバーガーの単著、『聖なる天蓋』〔以下『天蓋』と略記〕である。この『構成』および『天蓋』で展開されているバーガーの現実構成論を見ていく前に、その萌芽とも言える彼とS.プルバーク(Stanley Pullberg)との論文「物象化と意識の社会学的批判」〔以下「物象化」論文と略記〕を取り上げ、その性格を明らかにしておきたい。これは1965年に発表されたものであり、「意識の自由」を基調とするバーガーの人間観 社会観を提示した『招待』(1963年)と、その後彼に社会理論的主張が展開される『構成』(1966

年)との中間に当たるものである。この論文は、以下の二点、すなわち、『構成』『天蓋』以後の現実構成論につながる諸概念・理論図式が提示されていること、『招待』に見られるような「自由」の論点が、物事を自明化する意識（意識の物象化性）への批判というかたちで引き続き主題となっていること、これらの点によって重要な位置を占める論文である。

パーガーはこの論文において、人間による社会構成の過程を「客体化 (objectivation)」「客観化 (objectification)」の二つの概念で説明するが、『構成』『天蓋』での「外在化」「客体化」「内在化」の三項図式とは違っている。このことは『構成』以降の現実構成論の性格を規定する上で極めて重要である。というのも、この論文においてパーガーは、人間の社会構成に関する理論的説明を行為論的次元と認識論的次元に分けて行っているからである。

彼はまず「客体化」という概念が意味するものとして次のように述べる。「客体化という言葉でわれわれが意味するのは、人間の主観性が、自分自身にとってもその仲間にとっても、一つの共通の世界の要素として入手可能な創造物のなかに、自らを具象化する過程である」³³⁾。そしてこの過程は「人間の主観性は閉じられた内面性の領域としてあるのではなく、常に運動のなかにある志向性としてある、という事実とその根源をもっている」³⁴⁾と述べる。すなわちここでパーガーが表明しているのは、人間は他者ととも自らの存在を世界の中で実現させていくということであり、「世界を創造する存在」³⁵⁾として社会を構築していく共同的な行為主体であることの言明である。

さらに「客観化」という概念は、次のように

定義されている。「客観化というのは、客体化過程における契機のことであり、人間が自己の創造活動と創造物から、彼がそれを認識し、それを自己の意識の対象物にできるように距離を置く、ということの意味している」³⁶⁾。そしてそれ故に、この概念は認識論的な概念とされており、「人間によって創造された世界が彼によって理解されるときの方法」³⁷⁾を表しているとされるのである。

この二つの過程 契機によって世界が構成される様子は、次のように表される。「例えば人間は客体化の過程で物質的用具を生産し、次いでことばを用いることによってそれらを客観化する つまりそのとき以来彼に<知られる>ようになり、かつまた彼が他者に伝達しうる<一つの名称>を付与する のである」³⁸⁾。この発言にみられる、「客体化の過程で物質的用具を生産」、「ことばを用いることによってそれらを客観化」と言う二文は重要である。すなわち、この「客体化」「客観化」連関で表される社会構成の説明とは、前者において人間の現実的行為レベル（存在論レベル）での社会構成が指摘され、後者では人々の相互行為によって産出されたものが意識レベルにおいて理解され、人々にとって共通に入手可能な世界の要素として成立する様相（言語を通じた世界把握）が指摘されているのである。そしてパーガーは、人間の営みにおけるこの行為論（存在論）意識論（認識論）両レベルの諸相を捉えることによって始めて、社会の構成が説明されうることを主張しているのである。

また、この「物象化」論文において重要なもう一つの理論図式は、「疎外 (alienation)」「物象化 (reification)」連関の説明である。彼は「疎外」「物象化」を社会構成の倒錯した

形態として説明し、その例として物象化された役割について述べている。「例えば、ある一つの行為について、それは行為者がXという類型に属する人間だから（あるいはこういっていいかもしれない - Xという形の人間だからこそ、当然）行われた、というとき、われわれはその行為を物象化している」³⁹⁾。そして彼は、「行為者なき行為を規定したり創造者なき実践を規定したりしつづけるかぎり、物象化された社会過程はその本質からして疎外を生み出し、人間性を奪う」⁴⁰⁾と述べ、物象化とそれを導く「自明化された意識」の批判を行うのである。

このようにバーガーは「客体化」「客観化」連関と「疎外」「物象化」連関を明確に区別し、日常意識が持つ自明化作用（意識の物象化作用）に対しての意識批判の立場を明確にしている。このことは、バーガーが「客体化」「客観化」を人間にとってア・プリオリなものとし、「疎外」「物象化」を必ずしもア・プリオリではないものとみなす以下のような発言に明瞭に表れている。「客体化と客観化とは人間学的にみて必然的なものである。ア・プリオリに、人間の存在はこれらを欠いてはありえない。しかし、疎外と物象化とは人間の存在条件の経験的な特性である。それらは人間の存在にとってア・プリオリに必然的なものではない」⁴¹⁾。

しかしながらここで留意すべき点は、バーガーが「疎外」を「人間が自己の住む世界が彼自身によって創造されたものであることを忘れ去る過程」⁴²⁾と概念化している点である。さらに「物象化」に関しても「物性という特性が客観的な現実の基準になるような疎外過程における契機」⁴³⁾とされ、「疎外された客観化」と表現されている。すなわちこの「社会構成の倒錯した形態」が、ともに認識論レベルにおいて問

題化されているのである。この点は本稿において後に問題化するように、バーガー社会学の性格規定を行う上で大きな論点となっている。しかしながらこの点についてはここでは取り扱わず、次にこの論文の積極面であるバーガーが提示する意識の脱物象化の契機について確認しておきたい。

バーガーは、この論文の最後部分において、意識の物象化からの解放の契機として次の三点を挙げている。これら三点はともに、当該の社会成員が持っている意味秩序や行為の解釈図式を混乱させる性質を持つものである。

自明視された世界の崩壊を必然的にともなう社会構造の崩壊

異なった社会との接触によってもたらされる文化的衝撃

社会的にマージナルなところにいる個人や集団の存在

このように「物象化」論文では、『招待』に見られるような「意識の自由」の観点が意識批判の見地から語られており、さらには「意識の自由」を可能とする社会的な存在条件までも提示されている。社会が自明なものであることを失わせる要素までも、意識の物象化に対する解放の契機として捉えるバーガーの主張は、彼が社会の動的な側面に十分に留意した社会理論を構想していることを示している。実際、この論文のなかで彼は以下のように述べる。「人間とは行為する存在である。・ ・ ・ <中略> ・ ・ ・ 行為する存在として、人間は絶えず世界を意味ある全体として構成しつづける（さもなければ彼は有意味的にそのなかで行為することはできないであろう）のであるが、この過程は決して完結するということがない。全体性とは決して完成物ではなく、常に構成される過程のなかにある」⁴⁴⁾。

このような発言を鑑みても、後に展開されるバーガーの現実構成論は、彼自ら言明している人間と社会のダイナミズムを捉える弁証法的社会理論であることが、少なくともその構想段階において意図されていたことが理解されるのである。

しかしながら先に指摘したとおり、『構成』『天蓋』で示されるバーガーの現実構成論は必ずしも『招待』や「物象化」論文から期待されるような、「意識の自由」を媒介とする人間と社会のダイナミズムを含み持つ社会理論として描き切れていない側面を持つ。そこで次節以下では、『構成』『天蓋』における彼の現実構成論を取り上げることによって、その問題性について指摘したい。

2. バーガー現実構成論の問題性

前節で触れたとおり、『構成』『天蓋』でのバーガーの現実構成論は「外在化 (externalization)」「客体化 (objectivation)」「内在化 (internalization)」の三項図式で表されている。そして社会を、この三契機の弁証法的な過程とし、自らの現実構成論を人と社会がともにつくり つくられる動的な社会構成を捉える理論として提示するのである。しかしながらこのような彼の現実構成論は、バーガーが自ら意図しているような社会理論に必ずしもなり得ていない。そこで本節では、この三契機の問題性について主に『構成』でのバーガーの論述に依拠しながら、前節で取り上げた「物象化」論文と対比しつつ概観したい(1)。そしてその後、この問題性をバーガーの「物象化」概念に起因する問題として考察を行いたい(2)。

(1) 『構成』における現実構成論の概要

『構成』において「外在化」概念は次のように表現されている。「人間の存在は制止した内面性の閉じられた領域においては不可能である。人間はたえず自己自身を活動のなかに外在化しなければならない」⁴⁵⁾。このようなバーガーの概念規定は、「物象化」論文では「客体化」として規定され、人間の相互行為による社会形成の側面が語られたはずのものである。しかしこの点についての詳しい記述は見られず、『構成』での「外在化」の説明では、人間が社会を形成することの人間学的必然 (anthropological necessity) について議論が終始する。すなわちバーガーは、A・ゲーレン (Arnold Gehlen) や H・プレスナー (Helmuth Plessner) に依拠しつつ⁴⁶⁾、人間以外の動物の秩序界がその諸本能を通して自然によって決定されているのに対し、人間はその生存様式の多くを自らの手で後天的に作り出さねばならない事を強調する。彼はこれを「世界開示性 (world-openness)」と呼び、ある意味では人間における本来のあり方としての「自由」の存在を指摘しているのであるが、『構成』においてはその扱いは小さい。むしろ彼は、人間の身体が行動に安定をもたらす生物学的な手段を欠いており、それゆえに人間は自らの方向付けのための社会的秩序を必要とすることを強調する。すなわち、人間の世界開示性は「世界閉鎖性 (world-closedness)」へと変形されねばならないことを指摘するのである⁴⁷⁾。そしてこの点こそ、後に触れる現実構成論の根元的な問題性と関わってくる。その問題性の指摘の前に、次に「客体化」概念について見ておきたい。

バーガーは『構成』での「客体化」概念の説明にあたり、先の「外在化」の説明において重

要視していたゲーレンの議論を取り上げ、彼（ゲーレン）の「制度化（institutionalization）」の概念と密接に関連づけながら説明を展開する。バーガーは客体化を「人間の活動の外在化された創造物が客観性という性格を獲得する過程」⁴⁸⁾と定義し、このような客体化の過程を「制度化」「正当化（legitimation）」として説明する。バーガーによると、人間の全ての活動は習慣化を伴い、習慣化された行為は行為者によって一つの範型として理解されるという。「人間のすべての活動は習慣化を免れ得ない。どのような行為であれ、それはしばしば繰り返されると一つのパターンに変化し、次いでこのパターンは労力の節約ということで再生が可能になり、事実上、その行為の遂行者によってその範型（pattern）として理解されるようになる」⁴⁹⁾。そしてこの習慣化は「選択範囲を狭めるという重要な心理学的結果をもたらす」⁵⁰⁾とされ、これによって「人間の生物学的構造に欠如している活動の方向付けと特定化を可能にし、そのことによって、方向づけを欠いた諸々の衝動から生じる緊張の蓄積を解消する」⁵¹⁾とされるのである。

このような行為の習慣化に伴って、制度化が行われる。彼は制度化について以下のように述べる。「制度化は習慣化された行為が行為者のタイプによって相互に類型化（typification）されるとき、常に発生する⁵²⁾。いいかえれば、そうして類型化されたものこそが制度に他ならないのである」。すなわち制度とは類型化された行為のことである。そしてこの場合の類型化とは行為の類型化だけでなく、制度のなかにおける行為者の類型化が含意されている。これをバーガーは次のように表現する。「制度そのものが個々の行為と同様に個々の行為者をも類型

化する。制度は、Xというタイプの行為はXというタイプの行為者によって遂行されるものと想定する」⁵³⁾。ここで重要なことは、制度化において、行為の類型化が他者とともに共有されていることである。それによって、類型の社会性や歴史性が獲得される契機となるからである。そして特にこの歴史性を獲得することによって、制度は自らの客観性を完成させるとされる。すなわち社会が新たな参加者を獲得し、その参加者によって類型化された行為が受け入れられたとき、制度的世界が完成されるのである。しかしながらこの制度的世界は、その起源を新たな参加者によって問われたとき、それを首尾一貫した説得しうる形で示さなければならぬ。そのために行われる過程が「正当化」である。

正当化は意味の＜二次的＞客体化過程であり、その機能は「すでに制度化されている＜一次的＞客体化過程の産物を客観的に妥当なものにすると同時に、主観的にももっともらしいもの」⁵⁴⁾にすることにある。全体としての制度的世界は、さまざまに下位分化した制度的過程を意味的に統合するとともに、それへの参加者によって積極的に受け入れられるものにしなければならないのである。制度的世界はそれがどのようなものであるか説明され、それが正当であることを証明されることによって、個々人あるいは特定の下位社会や時代を超えた持続性を持ちうると思われるのである。

このように、『構成』における「客体化」概念の内実を形成する「制度化」「正当化」をそれぞれ概観してきたが、ここで確認すべきは、再び「物象化」論文との関係である。「物象化」論文では、「客体化（objectivation）」と「客観化（objectification）」が概念的に分けられ、前

者を社会構成における存在論（行為論）的側面とし、後者をその認識論的側面としていた。しかしながら『構成』での「客体化（objectivation）」概念は、そのような区別が曖昧化している。すなわち『構成』では、「客体化」概念の意味するものとして、類型化された行為図式が知識体系としてストックされる側面や、あるいはそのような知識が意味的に再構成（二次的客体化＝正当化）されるという認識論的レベルでの契機に終始しているのである。このような認識論的レベルにおける社会構成の営みは、「物象化」論文では「客観化（objectification）」として別途概念規定されていたものである。そしてさらに、人間の社会構成のもう一つの重要な側面である行為論的見地（「物象化」論文での「客体化（objectivation）」にあたるもの）については、『構成』では「習慣化」という行為選択の「負担免除」に重点が置かれた記述の部分においてしか該当していない。すなわち『構成』では、先に見た「外在化」概念においても、また「客体化」概念においても、その両契機において、他者との共同行為による新たな社会産出という側面が概念化されていないのである。そしてこのような問題性は、次に見る「内在化」概念においても顕著に表れるのである。

パーガーは『構成』における内在化概念の定義を、「客観的な出来事が意味を表している」ということの直接的な理解、ないし解釈⁵⁵⁾としている。そして彼は、『構成』におけるこの内在化の説明のほとんどを、社会心理学における「社会化（socialization）」の概念によって展開していくのである。

彼はこの社会化の説明のなかで、G.H.ミードの「意味ある他者（significant others）」論

に依拠し、子どもが「意味ある他者」との情緒的な同一化を通して役割や挙動を取得する事を説明する。さらにこのような第一次的社会化の進行によって、子どもの意識のなかには「一般化された他者」が形成されることになるのであるが、ここで留意すべきは、パーガーの次のような発言である。「意識のなかに一般化された他者が結晶化（crystallized）されたとき、客観的現実と主観的現実との間には調和的な関係（symmetrical relationship）が確立される。〈外界〉で現実的なものが〈内界〉で現実的なものと一致するわけである⁵⁶⁾。またこの他にも彼は、「〈社会化の成功〉ということばでわれわれが意味するのは、客観的現実と主観的現実との間に高度の調和（a high degree of symmetry）が確立されること⁵⁷⁾」という発言を行っている。たしかにパーガーの言うとおり、人間は社会化の過程を経ることによって、社会のなかで有意義的な行為を行うための基礎的な理解を獲得する。しかしながら上記の引用のように、人間が世界を理解するときの様態に関して、客観的現実と主観的現実との間のシンメトリーを想定してしまうと、理論的には個人と社会との間に矛盾を想定することができず、新たな有意義的な行為そのものが構想できなくなってしまうのである⁵⁸⁾。すなわち、先に指摘した『構成』における行為論的見地の不徹底の問題は、このような内在化概念の問題性ともなって表れているのである。

以上、「物象化」論文との関連で見えてきたように、『構成』でのパーガー現実構成論は、必ずしも人間と社会の動的構成を表現しうる理論モデルとなっていない。そして筆者は、このような問題性の中心を、「物象化」概念に対するパーガーの両義的評価にあると考えている。そ

ここでこの点について項を改め、これまで本論稿が明らかにしてきた『招待』、「物象化」論文、『構成』でのバーガーの著述を振り返りつつ、彼の現実構成論の問題性として考察を加えたい。

（2）バーガー現実構成論の問題性

本論稿第一章では、彼の社会学の出発点とも言える『招待』を取り上げ、社会の外在性を自明視するような従来の社会的パースペクティブに対し、哲学的な伝統を含み持つヒューマニスティックな社会学が提示されていることを確認した。『招待』第四章及び第五章では社会の統制的性格を描くことに力点が置かれていたのであるが、バーガーは第六章の「ドラマとしての社会」において、人間的自由を含み持った社会学が可能であることを示すと同時に、前二章において自らが示してみせた社会秩序志向的な社会学への批判が展開されていた。すなわち彼は、ゴフマンの社会学が示す人間のありかた（役割距離を遂行する人間像）を提示し、次のように述べていた。

「最も手の込んだ統制システムでさえ出し抜き腐敗させてしまう創意工夫を人間が身につけているという事実は、社会学主義的発想が押しつけてくる憂うつ状態に対するさわやかな解毒剤である」⁶⁹⁾。

バーガーはこの「ドラマとしての社会」論におけるこの一文によって、社会における自由の存在証明を行っただけでなく、そのような人間的自由を含み持った社会学が存在しうたことを、ゴフマンを例に示していたのである。そしてこの一文はさらに、「物象化」論文における次の

発言、すなわち、物象化が理論的レベルと理論以前の反省的レベルにおいて生じるとする次の一文ともつながっている。

「反省以前の意識や理論以前の物象化的な意識の表現である理論的な物象化は、それ自体が物象化されるのであり、ドグマへと硬直化し、意志表出の織物としての世界の可能性を閉め出す、ということもありうるのである」⁶⁹⁾。

したがって、この「物象化」論文でなされていた「意識の社会的批判」は、日常的なレベルでの意識批判を展開していたのみならず、理論的レベルでの物象化を行いうる可能性を持つ社会学そのものへの批判を提示することだったといえる。バーガーが『招待』において「社会学主義的発想が押しつけてくる憂うつ状態」と発言するのも、それ（社会学主義）が理論レベルでの物象化となり、意志表出の集まりとしての世界の可能性を閉め出す（人間と社会の弁証法が停止する）ことの危惧によるものだったと考えられる。『招待』及び「物象化」論文に見られるバーガー社会学の意義は、物象化の問題を日常的な経験構成の主体性と不可分に捉えることにそのよさがあったのである。

ところがバーガーは、そのような物象化された意識批判、とくに社会学が行いうる理論的レベルでの物象化への批判を行っているにもかかわらず、彼は自らの現実構成論においてその過ちを犯してしまっている。それは「物象化」論文と『構成』における以下の二文を対比させてみると明瞭である。

「物象化」論文

「例えば、ある一つの行為について、それは行為者がXという類型に属する人間だから（ある

いはこうっていいかもしれない Xという形
の人間だからこそ、当然）行われた、という
とき、われわれはその行為を物象化している」⁶¹⁾。

『構成』

「特定の社会集団のすべての成員に通用し、制
度そのものが個々の行為と同様に個々の行為者
をも類型化する。制度は、Xというタイプの行
為はXというタイプの行為者によって遂行され
るものと想定する」⁶²⁾。

前者は言うまでもなく、物象化批判の文脈で使
われているのであるが、後者は人間の社会構成
の要素として積極的に捉え返されてしまってい
る。そしてまさにこの点に、バーガー社会理論
のジレンマが表出してしまっているのである。
すなわちバーガーによる物象化論は、その積極
面として、物象化を日常的な現実性のなかで捉
え、人々の日常的な意識レベルでの経験構成
の主体性に関わるものとして捉える良さをもっ
ていたのであるが⁶³⁾、その一方で、彼が物象化
を意識過程の問題性としてのみ論じ、脱主観化
された規範形成のゆきすぎた形態として、認識
論の次元に限定して捉えてしまったところに問
題点があるのである。実はこの問題点は、彼が
「物象化」論文において、物象化を人間の意識
経験の一つの様式として捉えてしまったことに
その端緒を持っている。彼は物象化を文化横断
的かつ歴史貫通的な現象であると述べて、その
要因を人間の生物学的前提に求めている。

「われわれはその〔物象化の〕根源は人間の存
在に関するある種の根本的な恐怖、とりわけカ
オスに対する恐怖心にあると強く感じている。
この恐怖心は物象化だけが生み出すことのでき
る、ある種の堅固な秩序を確立することによっ

て和らげることができる」⁶⁴⁾。

彼において物象化は、人間の生物学的未熟さ
（自らが定位しうる環境の不在）から来る無秩
序への恐怖心を隠蔽するための社会的機能とし
て捉えられている。このようなバーガーの見解
は、『構成』における「制度化」「正当化」
の説明において、また『聖なる天蓋』におい
ては「ノモス(nomos)」「コスモス(cosmos)」
の説明の中で、ともに社会秩序の重要性の根拠
として積極的に導入されていく。すなわち「物
象化」論文において、彼が批判の対象としてい
るはずの「物象化」の問題性が不十分なまま放
置され、その後の『構成』及び『天蓋』での彼
の現実構成論における「物象化」の両義的評価
（批判の対象であると同時に人間の社会構成に
あたっての重要な要素とされる）へとつながっ
ていくのである。その端的な例証が、『天蓋』
における以下のような「宗教」理解に見いだす
ことができる。

バーガーは『天蓋』において、社会的に規定
されたすべての現実、死を典型とする様々
な＜潜在的非現実(lurking irrealities)＞に
よって脅かされており、社会的に構成された
「ノモス(規範秩序)」は、「アノミー(規範喪
失)」へと至る不断の危険に直面していると捉
えている。そして彼は以上の点を指摘した上で、
社会成員がこのようなアノミーへと至らないた
めの社会的方途として、人間による「宗教」の
建立を挙げるのである。バーガーにおいて「宗
教」とは、「それによって神聖なコスモスが確
立する人間の事業」⁶⁵⁾あるいは「神聖な様式に
おけるコスモス化」⁶⁶⁾と定義づけられる。こ
こで言われる「神聖」とは、「人間ではないが人
間とかかわる神秘的で恐れ多い力の資質であ
って、一定の経験対象に宿ると信じられているも

の」⁶⁷⁾である。このような神聖性の力こそ、人間の通常の生活を構成する「ノモス」を保護し、人々を「アノミー」から守る盾となるのである。すなわち神聖性は、人間経験において絶対的な他者性をもって現れる点にこそその特徴があるのであり、宗教はこの人間経験に対する超越性を取り込む形で意味投企を行う（コスモスを打ち建てる）ことによって、「ノモス」に対し存在論的な基盤を与えるのである。バーガーはこの点について次のように述べる。

「神聖は、日常生活のきまりきった茶飯事から<突出すること>、何か異常でひょっとして危険なものと解されるが、その危険を慰撫して、その力を日常生活の必要に応じて利用することもできる。聖なるものは人間以外のものと理解されるが、それでも人間にかかわり、他の非人間的現象（とくに、聖ならざる自然の現象）への関わり方とはちがった形で彼に関係する。かくて宗教を背負ったコスモスは、人間を超越するとともに人間を包み込むのである。聖なるコスモスは、人間とは別のはるかに強力な実在として人間に直面する。だがこの実在は、人間に呼び掛け、彼の生活を究極的に意味の豊かな秩序のなかに位置づけるのである」⁶⁸⁾。

宗教はしたがって、人間経験のすべてを包括する単一の意味秩序を生み出し、限界状況をも正当化して社会的に規定された現実を維持するのである。限界状況の最たるものである死の問題でさえ、それが<良き死>を得ることとして、意味ある世界の内部の出来事として説明づけられるのである。

しかしながら宗教によるこのような秩序維持機能は、それが神聖性によってもたらされる超

越的性格によって可能であるため、不可避免地人間経験の「疎外」「物象化」という問題を引き起こす。もとよりバーガーはこのような事態・人間経験について、『招待』や「物象化」論文において批判をおこなっていたはずである。たしかに『天蓋』においても、それらが「虚偽意識」であることの留意は行っている。しかしながらバーガーはそのような留意を行うにも関わらず、限界状況において顕現するとされる<カオス(chaos, 混沌)>への人間の恐怖心を強調し、以下のように発言するのである。

「非常に重要なことは、この主観的疎外の現象をアノミーと混同しないということである。逆に、そのような疎外はアノミーに対する最も効果的な障壁になることができる」⁶⁹⁾。

「われわれが主張したいことは、人間の世界構成と世界維持の企てにおける宗教の歴史的役割は、その多くが宗教に内在する疎外力にもとづくものだということである」⁷⁰⁾。〔引用文中の傍点は引用者〕

このような問題性、すなわち社会構成のプロセスのなかに物象化が導入されているという点については、「物象化」論文においても見受けられるものであった。しかしながら「物象化」論文においては、当該の意味秩序に混乱をもたらす「マージナルな存在」を意識の物象化からの解放の契機として捉え、それについての積極的な評価がなされていた。また『招待』においては、「エクスタシス」の概念によって人間的自由の可能性が示唆されてもいた。このような点を踏まえ筆者は、『天蓋』での記述のように「アノミー（規範喪失）」についての否定的側面のみがとり上げられるべきではなく、むしろそ

れを自明性の解体による人間経験の主体化の契機として積極的にとり上げられるべきではないかと考える。いわば「アノミー」を克服していく形で、人間の新たな社会構成の側面にこそ、注目されるべきだと考えるのである。

しかし初期バーガーの社会学の基調である「自由」の指摘・提言からの変遷、すなわち『構成』『天蓋』以降における自明なものの崩壊にたいする否定的評価は、「物象化」論文から『構成』『天蓋』にかけての概念規定の変化となって明瞭に現れていると言わざるを得ない⁷¹⁾。というのも、これまでに見てきたように、『構成』『天蓋』において規定されている「外在化」の側面は、人間の生物学的構造から帰結する堅固な社会秩序の構築の営み、すなわち行為の多元性の縮減に焦点化されているからであり、また個人が主観的現実を獲得する「内在化」の契機についても、客観的現実と主観的現実が一致する側面に目を向けた社会化概念からの説明に終始してしまい、個人と社会の緊張関係のなかで、個人の意識の中に新たな現実が構築されていく側面への視点が不十分だからである。そしてこのような「外在化」「内在化」概念の問題性は、「物象化」論文における「物象化」された人間経験への批判的提言にもかかわらず、その後の現実構成論のなかで、バーガー自らが「物象化」を社会の「客体化」の形成要件として積極的に捉え返してしまったことを意味しているのである。

筆者は以上の点からバーガーの現実構成論の問題性を「アノミー（規範喪失）」への否定的評価の点に求め、それがバーガー社会学の持つ豊かさ（意識の脱自明化の提言、現実の多元性への着目）を損なうものとして考えるのである。

しかしながら彼の現実構成論のなかに、人と社会との弁証法的な関係を可能とする要素が全くないわけではない。最後にそれらの点について指摘し、バーガー現実構成論における主体化の可能性として考察したい。

・バーガー現実構成論における「主体化」の可能性

前章ではバーガー現実構成論の問題的変遷である秩序志向的性格への傾倒について考察を行ったのであるが、この問題性とは端的に言うところ、バーガーが内在化概念を社会化の観点から論述してしまった結果、人間が社会に対して創発的に働きかける側面、すなわち、客観的現実に対抗しうる自立的な主観的意識の生成や、その意味投企としての共同的な行為の視角について十分な理論展開を行う積極的契機を見失ってしまった事である。そこで筆者は、この積極的な契機について、飯田剛史氏の提案（飯田1978, 1990）を受けて「主体化」の契機として新たに概念化することにしたい⁷²⁾。ただし筆者は、この「主体化」の契機が人間による社会産出を表す契機であることを明確にするためには、すでに使用してきた図式に従って、意識的レヴェルと行為的レヴェルとの両次元の区別との関連において概念化する事が必要であると考え。そこで本稿では、客観的現実に対抗しうる自立的な主観的意識の生成を個人の意識レヴェルでの「主体化」と捉え、また、その意味投企としての共同的な行為実践を行為論（存在論）レヴェルでの「主体化」として捉えることにしたい。これらそれぞれは、前者が「内在化」概念に密接に関わる契機となり、後者が「外在化」概念に密接に関わる契機となるのであるが、この双

方の視角において「主体化」が構想されてこそ、バーガーの現実構成論はその本来的意図を表すことができると考えられる。

このように、バーガーの現実構成論に関して「主体化」契機を補完した上で考察を進めていくと、彼の現実構成論のなかに、人と社会の動的な関わりを捉えようような要素が全くないわけではない事が見えてくる。その要素とは、バーガーの「身体」に関する言説、及び彼の現代社会観である。すなわち、バーガーの「身体」観に基づく「意識の二重性」論、現代社会を「態度変更」の時代と捉えるバーガーの現代社会観の二点において、人間の意識レベルでの「主体化」を用意する要素が見いだせるのである。尚、この「主体化」契機は人間学的必然性の側面から導き出されるものであり、これは現代社会の歴史的特性として導き出されるものである。このことは、バーガーの社会理論が人間論や歴史論を含み持つ幅広いものであることを意味するのであるが、以下、これらの点に関して順を追って説明していきたい。

1. 意識レベルでの主体化契機その1

バーガーの「身体」観と「意識の二重性」論

バーガーの「身体 organism」理解に関する特徴は、身体と意識の離心性的性格を指摘する点にあり、人間の主体化を考える上で重要な論点となっている。この指摘は『構成』での、人間の自己認識における意識と身体の離心的性格について明確に述べた次の発言からうかがうことができる。

「社会的に規定された環境のなかにおける人間の身体と人間の自我の共通した発達は、身体と自我との特殊人間的な関係と結びつきをもって

いる。この関係は離心的なものである。というのも、一方では、人間は他のすべての動物生体にいえるのと同様の意味で、一つの身体である。他方、人間は一つの身体をもっている。つまり、人間は自己自身を一つの実在（entity）として経験する。しかもこの実在は身体と同一のものとしてあるのではなく、逆にその身体を自分の意のままにできるものとして存在する。換言すれば、人間が自己自身を経験するという事は、身体であることと身体をもつこととの間のバランス このバランスはその度ごとに回復されなければならない のなかを常に彷徨する、ということなのである」⁷³⁾。

このようなバーガーの人間理解、すなわち人間の特性としての心身の分離に関するバーガーの理解は、人間の意識内における複数の自己の成立の前提条件を語っているものとして非常に興味深い。この点をより明確に理解するために、個人の意識内における複数の自己の存在、及びそれが意味する重要な事態に対するバーガーの指摘について見ておきたい。この論点は、『天蓋』における「社会化された自己」と「社会化されない自己」との関係をめぐる「意識の二重性」についての以下のような指摘に明確に見ることができる。

「客体化とは、そのなかに住む個人らの埒外（external）であるリアルな社会的世界を産み出すことであり、内在化とは、この同じ社会的世界がこうした個人それぞれの意識内に現実の地位を獲得することを言う。ところが、後者のプロセスは大変重要な随伴の様相 つまりその構成として社会化されたものと社会化されないものことからなる意識の二重性（duplication of

consciousness) という性格をもたらす。意識は社会化に先立って存在する。そのうえ、意識は決して完全には社会化されず、たとえほぼ完全であるとしてもその人自身の身体過程に属する不断の意識がこの性格を保持する」⁷⁴⁾。

以上のようにバーガーは内在化の局面に関する上記の説明のなかで、個人の主観的意識のうち形成される社会化された部分と社会化されない部分との「二重性 (duplication)」について言及している。そしてさらに重要なのは、意識内におけるこの二つの要素が、内的な対立を孕んでいる点についての指摘である。

「意識の二重性は、外的な社会と個人の対立を意識そのものの内部で繰り返しながら、自我の社会化された部分と社会化されない部分との間の内的な対立 (internal confrontation) という結果になるのである。どちらの場合も、それぞれの二要素が機械的な因果の関係とならず、むしろおたがいを繰り返し連続的に産み出し合うのである限り、その対立は一種の弁証法的な性格をもつ。そのうえ、自我の二つの部分はたがいに内的対話をかわすことができる」⁷⁵⁾。

さらに別の箇所においても、この社会化された自己と社会化されない自己の間には「弁証法的な緊張 (dialectical tension)」⁷⁶⁾があるとバーガーは述べる。筆者は、バーガーのこの指摘、すなわち「社会化された自己」と「社会化されない自己」との間に存在する<弁証法的な緊張>こそ、彼の現実構成論が主体化の契機を含みもつ可能性を示していると考え。たしかにこの点に関しては、自己の意識内における内的関係を弁証法として想定しうるのかという問題

がある。というのも、「社会的自己」と弁証法的関係を構成するとされるもう一方の極が、究極的には「身体過程に属する不断の意識」となるからであり、バーガーの言う内的意識における自己間の弁証法が、存在次元の違う二つの極の間での弁証法を意味してしまうからである⁷⁷⁾。しかしながら筆者は、個人の意識内におけるこのような緊張関係にこそ、あえて注目したいのである。というのも、このような意識内での緊張関係がたとえ十全なかたちで認知できなくとも、個人のなかでなにかしらの違和感として知覚されることはあるのであり、これを契機として、その違和感を言語化したり行為を起こしたりという局面が立ち現れると考えるからである。すなわち、個人の意識内における内的自己の対話や、その対立としての自己葛藤に、人間の意識レヴェルでの「主体化」の端緒を見いだしうると考えるのである。

ところで、このような内的自己の対話や葛藤による「主体化」の可能性は、バーガーの現代社会に対する見方とともに理解された場合、より明確に立ち現れてくる。それは現代社会を「態度変更 (alternation)」の時代と捉える視点であり、この歴史特性によって内的自己は活性化されるのである。そこで次に、現代社会がもつ歴史的特性から導き出さうこの「主体化」の可能性について論述する。

2. 意識レヴェルでの主体化契機その2

「態度変更の常態化」としての現代社会

バーガーによると、近代社会の成立という歴史的事態は、現代人に対して多くの「社会的自己」をもたらす結果を産み出したとされる。バーガーはこのような事態を、現代社会を態度変更の時代とみなす事によって表現している⁷⁸⁾。

態度変更の時代としての現代社会とは、個人が複数の社会的世界を遍歴していく時代のことである⁷⁹⁾。現代社会において複数の社会的世界が成立しうるのは、近代社会の進行に伴って社会的分業が高度に発達したことに起因するものである。すなわち、近代社会とは高度に分業が発達した社会のことであり、これに伴って、全体的な社会に対する様々な下位世界が出現することとなったのである。そしてその結果として、バーガーは現代社会を人間に対する世界の開示性が高まった時代として捉えているのである。つまりバーガーの発想においては、「主体化」の契機となりうる現代人の自由性は、身体による社会からの逃走（社会的自己に対する意識内での不断の相対化）という人間学的必然によって担保されるだけでなく、近代社会の成立という歴史的契機によっても担保されているのである。

現代社会及び現代人の特性に関するバーガーの理解については、前近代社会から近代社会へと移行する様子を指摘した、彼の以下の発言を参照することによって明瞭に理解される。

「未開社会や古代社会においてほとんどの人は、（部族、氏族、さらにポリスなどという）社会制度に住んでいたが、こういう制度は人々が他の人々と共有する有意義な関係を一切合財備えていたと言ってよい。現代の個人は世界が多元的である状況の中にあり、互いに競いあい、往々にして矛盾しあう多くの妥当性構造の間を右往左往しているのである」⁸⁰⁾。

バーガーにおいて現代社会とは、人間が自らの行為を方向付ける基準を宗教や社会制度の中に見いだすことができず、個々人自らの手によっ

て行為基準を作りだしていかなければならない時代のことを指している。このことは、現代人に対して常に意味喪失の感情を抱かせることになり、「故郷喪失」という不安定な感情を不断に意識させるものである。しかしながら、このような現代社会の特性は両義的なものであり、その積極面として現代人が獲得しうるものが、「自由（freedom）」なのである。

現代人が獲得する自由とは、「個人化（individuate）」に根差した自由である。そしてこのような現代人の自由性は、現代人のもつ自己特性に表れることになる。バーガーは1973年に出版された『故郷喪失者たち』での論述において、これを以下の4つの特性として表現している⁸¹⁾。

アイデンティティが特別に開かれた（peculiarly open）状態にある点

アイデンティティが細分化（differentiated）されている点

アイデンティティの自己反省的な（reflective）性格

アイデンティティの自己中心的（individuated）性格

上記4点の指摘のうち、とくに と は「主体化」の可能性という点から重要である。というのも、 の特性によって、個人の意識内における複数の自己が広範に獲得されるからであり、また の特性によって、これら獲得された自己が意識内部において反芻され、場合によっては新たな行為的契機が生まれうるからである。特にこの の特性は非常に重要である。なぜならば、アイデンティティの自己反省的な（reflective）性格の高まりによって、個人の意識内における複数の自己間の対話や葛藤が促進されるとともに、一個人内では処理しきれない問題に

については、それに対する注意深い知的理解とともに、他者と共同して問題解決にあたらねばならないとする意識が芽生えるからである。もちろん、個人内において感知されるすべての問題状況が外部への働きかけになるわけではないが、人間が違和を感じる問題状況というのは、社会が抱える問題状況に連関する場合が多いのである。いわば「社会は細部に宿る」(浜日出夫氏)⁸²⁾のであって、バーガーが現象学的社会学を基盤としながらも包括的な社会理論モデルを提示しようとするのは、まさにこの点への視角があることに他ならないのである。

3. 行為レベルにおける主体化契機の理解に向けて

現実構成論に対する理論的補完の必要性

以上述べてきたように、意識レベルでの「主体化」の契機に関しては、バーガーの著述に内在するかたちで取り出すことが可能である。個人の意識内における複数の自己存在とその葛藤は、その個人においてなされている既存の自己や社会の理解とは別様のものを構想する契機となるのであり、また、態度変更の常態化をもたらす現代社会の歴史的特性は、そのような自己のあり方をさらに促進させるのである。しかしながらこれらの契機は、人間の「主体化」を可能とするものの片方の局面でしかない。すなわち、意識レベルでの「主体化」は、人間が実践的な「主体」的社会存在へと至る最初の契機でしかなく、個人の内面に新たな現実のビジョンが構成されていく側面とともに、その新たな現実が他者との関わり合いを通じて、社会的に構成されていく側面が想定されなければならないのである。そしてこの後者の側面こそ、行為論（存在論）レベルでの「主体化」契機

として構想されるべき点なのである。

本稿全体を通して明らかなどおり、バーガーの現実構成論においてはこの行為論（存在論）の見地が不十分であることは否めない。このことは、バーガーの現代社会の捉え方を見てみると、より明瞭に理解することができる。バーガーは現代社会において複数の社会的世界が成立しうるのは、近代化の進行に伴って社会的分業が高度に発達し、社会構造が複雑化したことに起因するとしている。ところでここで言われている、現代社会における「社会的世界の複数化」と「分業の発達による社会構造の複雑化」は、同じ事態を表しているはずのものである。すなわちバーガーは、同一の事態に対して前者を意味的次元で捉え、後者を存在論的次元で捉えていることになる。社会は意味的次元の側面をもつ以上、バーガーのように二元論的に捉えるのは正しい。ただしこの点で重要なことは、バーガーは後者をすでに達成された歴史的事実としてのみ扱い、何故そのような歴史的事実が成立するに到ったのか、その因果論的側面への視角に乏しい点である。存在論的次元の因果連関は、人間の意味構成の営みにつきる問題ではなく、場合によってはその意図を越えて展開していく性質をもつものである。すなわち、人間の共同行為による外在化・客体化過程は、意味的次元のみで語り尽くせる問題ではなく、人間の意味付与行為を越えて展開していく側面が十分に捉えられなければならないのである。しかしながらバーガーの現実構成論においては、以上のような視角が極めて不十分なのであり、これらの点を意識した理論的補完が必要なのである。そうすることによって初めて、上記で示した側面を含む十全な人間と社会の関係性が把握されるのであり、人間の具体的な実践行為を射程に

とらえた行為レベルでの「主体化」契機が理解されるのである。そしてこの理解に成功したとき、バーガーが「社会的世界の現実を築き上げる人間的な意味の豊かな行為の表現」（『聖なる天蓋』）と呼ぶ、彼が本来的に求めていたであろうと想定しうる「物象化されない現実の社会的構成モデル」として、彼の「現実の社会的構成」論が可能となるのである。

最後に筆者は、バーガー社会学において、行為論的見地を含んだ社会学を構想可能にしうる議論が存在することについて簡単に指摘しておきたい。それはバーガーが主に1970年代後半以降に展開を始める、彼の「媒介構造論」についてである。この「媒介構造（mediating structures / intermediary structures）」概念は、社会を構成する具体的な中間集団を指し示すものとなっており、その例として教会、家族、地域、自主団体などが挙げられている。このような議論は、バーガー社会学の中でこれまであまり論じられてこなかった行為論（存在論）的見地を主題化しうるものではないかと考えており、バーガー社会学を体系的に理解する上で重要な論点であると考えている。筆者は人間による現実構成が他者との共生関係のなかで行われるというバーガーの視点に、大いに共鳴するものである。と同時に、彼の人間観 社会観の基本にある飽くなき相対化の精神、すなわち意識の「自由」の精神は、自らとその世界に対する批判者として重要なものであると考える。彼の「媒介構造」論がこの両輪をともに併せもつものであったとき、「バーガー社会学」は極めて有意義なものとなるように思われるのであるが、この点については稿を改め、別途論じていきたい。

注

- 1) 船津衛『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣、1999年、1頁。
- 2) 高橋徹『現代アメリカ知識人論』新泉社、1987年、125頁。
- 3) 高坂健次「現代アメリカにおける知識社会学の問題」『社会学講座11知識社会学』東京大学出版会、1976年、54頁。
- 4) 奥田和彦「アメリカ社会学の現在 北アメリカにおける現象学研究の現状」『現代思想』3-2、1975年、191頁。尚、バーガーは当時ニュー・スクールに在籍しており（1963年～1970年）、1965年から1970年まではニュー・スクールのgraduate faculty of political and social scienceが発行する雑誌Social Researchの編集者（editor）もつとめていた。
- 5) 山口節郎『社会と意味 メタ社会学的アプローチ』劉草書房、1982年、74頁。
- 6) James L.Heap and Phillip A.Roth, “On Phenomenological Sociology” *American Sociological Review*, vol.38-3, june, 1973, pp354-367. 彼らはこの論文の冒頭で、“現象学的社会学”と呼ばれるものについての関心がますます増えている・・・中略・・・もしこの関心が支持されうるものであり、また実際に、この学問的下位区分（sub-discipline）が社会的世界に対する私たちの知識に貢献しうるものであるならば、私たちは現象学的社会学が何であり、また何になりうるかについて明らかにせねばならない”（p.354.）と述べ、当時の現象学と社会学の活発な関わりについて整理を行う必要性を訴えている。
- 7) Ibid.,p362
- 8) Peter L.Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963, pp52-53.（水野節夫、村山研一訳『社会学への招待』思索社、1979年、78頁）
- 9) Ibid., p23.（邦訳、37頁）
- 10) Ibid., pp169-176.（邦訳、248-258頁）
- 11) Ibid., p176（邦訳、258頁）
- 12) Ibid., p93.（邦訳、137頁）
- 13) Ibid., p92.（邦訳、135頁）

- 14) Ibid., p95. (邦訳, 140頁)
- 15) Ibid., p96. (邦訳, 141頁)
- 16) Ibid., p121. (邦訳, 177頁)
- 17) Ibid., p121. (邦訳, 177頁)
- 18) Ibid., p126. (邦訳, 185頁)
- 19) Ibid., p127. (邦訳, 186頁) 尚, 引用文中の〔〕内は引用者の補記である。以後必要な場合において引用者が補記を加える場合は, () を利用して行う。
- 20) Ibid., p127. (邦訳, 186-187頁)
- 21) Ibid., p128. (邦訳, 187頁)
- 22) Ibid., p128. (邦訳, 188頁)
- 23) Ibid., pp129-134. (邦訳, 189-196頁)
- 24) Ibid., p135. (邦訳, 198頁)
- 25) Ibid., pp133-134. (邦訳, 195頁)
- 26) Ibid., p134. (邦訳, 196頁)
- 27) Ibid., p135. (邦訳, 198頁)
- 28) Ibid., p138. (邦訳, 201-202頁)
- 29) Ibid., p142. (邦訳, 208頁)
- 30) Ibid., p142. (邦訳, 208頁)
- 31) Ibid., p149. (邦訳, 218頁)
- 32) Ibid., p149. (邦訳, 218頁)
- 33) Peter L.Berger (with Stanley Pullberg) "Reification and the Sociological Critique of Consciousness" *New Left Review*, No.35, 1966, p60. (山口節一郎訳「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』第二号, せりか書房, 1974年, 101頁) 尚, 筆者はこの論文を参照するにあたり, *History and Theory* 版(1965)ではなく, 同内容のものが翌年に再録された上記の *New Left Review* 版(1966)を使用した。
- 34) Ibid., p60. (邦訳, 101頁)
- 35) Ibid., p60. (邦訳, 101頁)
- 36) Ibid., p60. (邦訳, 101頁)
- 37) Ibid., p60. (邦訳, 101頁)
- 38) Ibid., pp60-61. (邦訳, 101頁)
- 39) Ibid., p66. (邦訳, 108-109頁)
- 40) Ibid., p68. (邦訳, 112頁)
- 41) Ibid., p61. (邦訳, 102-103頁)
- 42) Ibid., p61. (邦訳, 101-103頁)
- 43) Ibid., p61. (邦訳, 102頁)
- 44) Ibid., p61. (邦訳, 103頁)
- 45) Ibid., p53. (邦訳, 91頁)
- 46) Peter L. Berger (with Thomas Luckmann), *The Social Construction of Reality*, Doubleday Anchor, [1966] 1967, p195., p197 (山口節一郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977年, 327頁及び330頁)。パーガーは「外在化」概念に関する『構成』の脚註1)において, 人間の生物学的な特質を哲学的人間学の観点からみた重要な論者としてH.プレスナ - 及びA.ゲーレンを挙げている。さらに脚註16)においても, 外在化の生物学的基礎と制度の発生(emergence)との関係の議論がゲーレンによって展開されていることを明記している。
- 47) Ibid., p51. (邦訳, 89頁)
- 48) Ibid., p60. (邦訳, 104頁)
- 49) Ibid., p53. (邦訳, 91頁)
- 50) Ibid., p53. (邦訳, 92頁)
- 51) Ibid., p53. (邦訳, 92頁)
- 52) Ibid., p54. (邦訳, 93頁)
- 53) Ibid., p55. (邦訳, 94頁)
- 54) Ibid., p92. (邦訳, 157頁)
- 55) Ibid., p129. (邦訳, 219頁)
- 56) Ibid., p133. (邦訳, 225頁)
- 57) Ibid., p163. (邦訳, 276頁)
- 58) このような見地からのパーガー現実構成論批判は, 影井論文によって徹底されている。影井充「パーガー社会学における現実構成論 弁証法と現実性」『現代社会理論研究』第5号, 1995年, 5-18頁。
- 59) P.L.Berger, op. cit., 1963, p134. (邦訳, 196頁)
- 60) P.L.Berger (with S.Pullberg), op. cit., 1966, p66. (邦訳, 108頁)
- 61) Ibid., p66. (邦訳, 108-109頁)
- 62) P.L.Berger (with T.Luckmann), op. cit., [1966] 1967, p55. (邦訳, 94頁)
- 63) 豊泉周治氏は, このような現象学的アプローチによるパーガー物象化論の特徴をフランクフルト学派の批判理論と比較し, パーガーの物象化論が一面ではその皮相性を免れ得ないものの, ユートピア主義的な傾向を払拭したかたちでの批判的可能性を持ちうるものとして指摘してい

- る。豊泉周治「現象学的社会学と意識の社会学的批判」『富山大学教養部紀要』20-1, 1987年, 139-156頁。
- 64) P.L.Berger (with S.Pullberg), op. cit., 1966, p68. (邦訳, 111頁)
- 65) Peter L.Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday Anchor, [1967] 1990, p25, (園田稔訳『聖なる天蓋』新曜社 1979年, 38頁)
- 66) Ibid., p25. (邦訳, 38頁)
- 67) Ibid., p25. (邦訳, 38頁)
- 68) Ibid., p26. (邦訳, 38-39頁)
- 69) Ibid., p93. (邦訳, 146頁)
- 70) Ibid., p89. (邦訳, 139-140頁)
- 71) バーガー社会理論に関する詳細な概念整理については山寄論文を参照されたい。山寄哲哉「バーガー社会学とその社会批判的位相」西原和久編著『現象学的社会学の展開』青土社, 1991年, 163-204頁。
- 72) この「主体化」という概念枠組みによってバーガーの三項図式を批判的に修正するという発想は、飯田剛史氏の論考(1978, 1990)のなかで先見的に示されている。筆者は氏の着想から大きな示唆を受けているが、本稿ではこの「主体化」契機の可能性についてバーガーの著述に内在しつつ、具体的に探っていくことを目的としている。また筆者は、本文でも述べた通り、「主体化」契機を人間による社会産出を表す概念であることを明確にするため、意識的レヴェル・行為的レヴェルの両者の次元において「主体化」契機を明確に概念化することが重要だと考えている。飯田剛史「宗教社会学における現象学的視点と存在論的視点 P.L.バーガーとデュルケム -」『ソシオロジ』22-3, 1978年, 49-66頁。同じく飯田剛史「バーガーとルックマンの社会学」『現代社会学の諸理論』中久郎編, 世界思想社, 1990年, 96頁-112頁。
- 73) P.L.Berger (with T.Luckmann), op. cit., [1966] 1967, p50, (邦訳, 87-88頁)
- 74) P.L.Berger, op.cit., [1967] 1990, p83, (邦訳, 128頁)。引用文中の訳出に関しては、引用者が変更を加えた。
- 75) Ibid., p84, (邦訳, 129頁)。引用文中の訳出に関しては、引用者が変更を加えた。
- 76) Ibid., p83, (邦訳, 128頁)
- 77) 社会的存在のレヴェルで捉えられた自己(社会的自己)と、社会的次元を越えていくような人間の身体的特性に根差した自己(社会化されない自己)との関係が、お互いの矛盾関係のなかで相互に影響を与えあいつつ、新たな存在を生み出していく積極的な関係を達成しうるのかという問題性については、十分な検討を要する問題である。
- 78) P.L.Berger, op. cit., 1963, pp54-65. (邦訳, 81-98頁)
- 79) 片桐雅隆氏は、このような現代人における生活歴の変遷の高まりを「私化(privatization)」という観点から捉え、「私化」の進展をその特質として持つ現代社会を有効に捉えうる社会理論として、バーガーの社会学やシンボリック・インタラクショニズムを挙げている。特に片桐氏は、社会的生活世界(social life-worlds)の複数化(pluralization)に関するバーガーの現代社会論を私化論と位置付け、その理論的有効性を論じている。片桐雅隆『変容する日常世界』世界思想社, 1991年。
- 80) Peter L.Berger, *A Rumor of Angels*, Doubleday, 1969, p44. (荒井俊次訳『天使のうわさ』ヨルダン社, 1982年, 96頁)
- 81) Peter L.Berger, *The Homeless Mind* (with Brigitte Berger and Hansfried Kellner), Random House, 1973, pp77-79. (高山真知子他訳『故郷喪失者たち』新曜社, 1977年, 85-88頁)
- 82) 浜日出夫「社会は細部に宿る ミクロ-マクロ問題再考」西原和久編著『前掲書』1991年, 137-162頁。

文献リスト

- Peter L.Berger, *Invitation to Sociology*, Doubleday Anchor, 1963. (水野節夫, 村山研一訳『社会学への招待』思索社, 1979年)
- Peter L.Berger (with Stanley Pullberg), "Reification and the Sociological Critique of Consciousness" *New Left Review*, No.35, 1966. (山口節一郎訳

- 「物象化と意識の社会学的批判」『現象学研究』第
二号，せりか書房，1974年）
- Peter L. Berger (with Thomas Luckmann), *The
Social Construction of Reality*, Doubleday
Anchor, [1966] 1967. (山口節郎訳 『日常世界
の構成』新曜社，1977年)
- Peter L. Berger, *The Sacred Canopy*, Doubleday
Anchor, [1967] 1990. (園田稔訳 『聖なる天蓋』
新曜社，1979年)
- Peter L. Berger, *A Rumor of Angels*, Doubleday,
1969. (荒井俊次訳 『天使のうわさ』ヨルダン社，
1982年)
- Peter L. Berger, *The Homeless Mind* (with Brigitte
Berger and Hansfried Kellner), Random
House, 1973. (高山真知子他訳 『故郷喪失者たち』
新曜社，1977年)
- 船津衛 『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣，
1999年。
- 高橋徹 『現代アメリカ知識人論』新泉社，1987年。
- 高坂健次 「現代アメリカにおける知識社会学の問題」
『社会学講座11 知識社会学』東京大学出版会，
1976年。
- 山口節郎 『社会と意味 - メタ社会学的アプローチ - 』
剏草書房，1982年。
- 奥田和彦 「アメリカ社会学の現在 北アメリカにお
ける現象学研究の現状」『現代思想』3
- 2，1975年。
- James L. Heap and Phillip A. Roth, "On Phenomenological
Sociology," *American Sociological Review*, vol.38-3,
June, 1973.
- 影井充 「バーガー社会学における現実構成論 - 弁証
法と現実性 - 」『現代社会理論研究』第5号，
1995年。
- 豊泉周治 「現象学的社会学と意識の社会学的批判」
『富山大学教養部紀要』20-1，1987年。
- 山寄哲哉 「バーガー社会学とその社会批判的位相」
西原和久編著 『現象学的社会学の展開』青土社，
1991年。
- 飯田剛史 「宗教社会学における現象学的視点と存在
論的視点 - P・L・バーガーとデュルケム
- 」『ソシオロジ』22-3，1978年。
- 飯田剛史 「バーガーとルックマンの社会学」『現代社
会学の諸理論』中久郎編，世界思想社，
1990年。
- 片桐雅隆 『変容する日常世界』世界思想社，1991年。

Problems with P.L. Berger's "The Social Construction of Reality" and Possible Ways to Regenerate It

Koji YOSHIDA *

Abstract: In this paper, I take up P.L. Berger, a prominent phenomenological sociologist in America, and review his social theory "The Social Construction of Reality." In his early works, Berger posited that new sociology took notice of human subjectivity against social functionalism as a normative paradigm on American sociology. But his later theoretical work "The Social Construction of Reality" does not necessarily succeed in grasping human subjectivity or the dynamics of society. In order to discuss these problems, I first examine Berger's early book *Invitation to Sociology* and his argument for epistemological "freedom". Secondly, I take up his later books *The Social Construction of Reality* and *The Sacred Canopy*, which state his central theoretical concepts, and I demonstrate that his social theory is apt to describe society as an order-oriented one. Moreover, I point out that his order-oriented social theory is caused by his concept on "reification", because his understanding toward "reification" is an ambivalent one. Finally, I state that his social theory needs some theoretical complements and propose that his social theory should be understood while considering the distinctions and relationships between the ontological and epistemological aspects. With this final consideration, I try to explore ways to regenerate Berger's social theory as a dialectical one that can dynamically grasp the relationship between man and society.

Keywords: epistemological freedom, the social construction of reality, externalization-objectivation-internalization, dialectical social theory of man and society, reification, subjectivation, ontological aspect and epistemological aspect

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University